

一般社団法人レジリエンス協会

組織チーム活動報告

2014.7.22

株式会社インターリスク総研

田代 邦幸

組織チームの活動方針

- 1回／1～2ヶ月の頻度で研究会を開催
 - 各回のテーマは「組織のレジリエンス」に関するもので、参加者の皆様にとって関心の高いものを随時選定
 - テーマに関する調査報告 + ディスカッション
 - 報告内容およびディスカッションの内容は「レジリエンス・ビュー」に掲載して発表
- 研究会の後には飲み会を開催(重要)
 - 割り勘をお願いします(最重要)
- 年間の活動結果を何らかの形でまとめて公開したい

活動実績

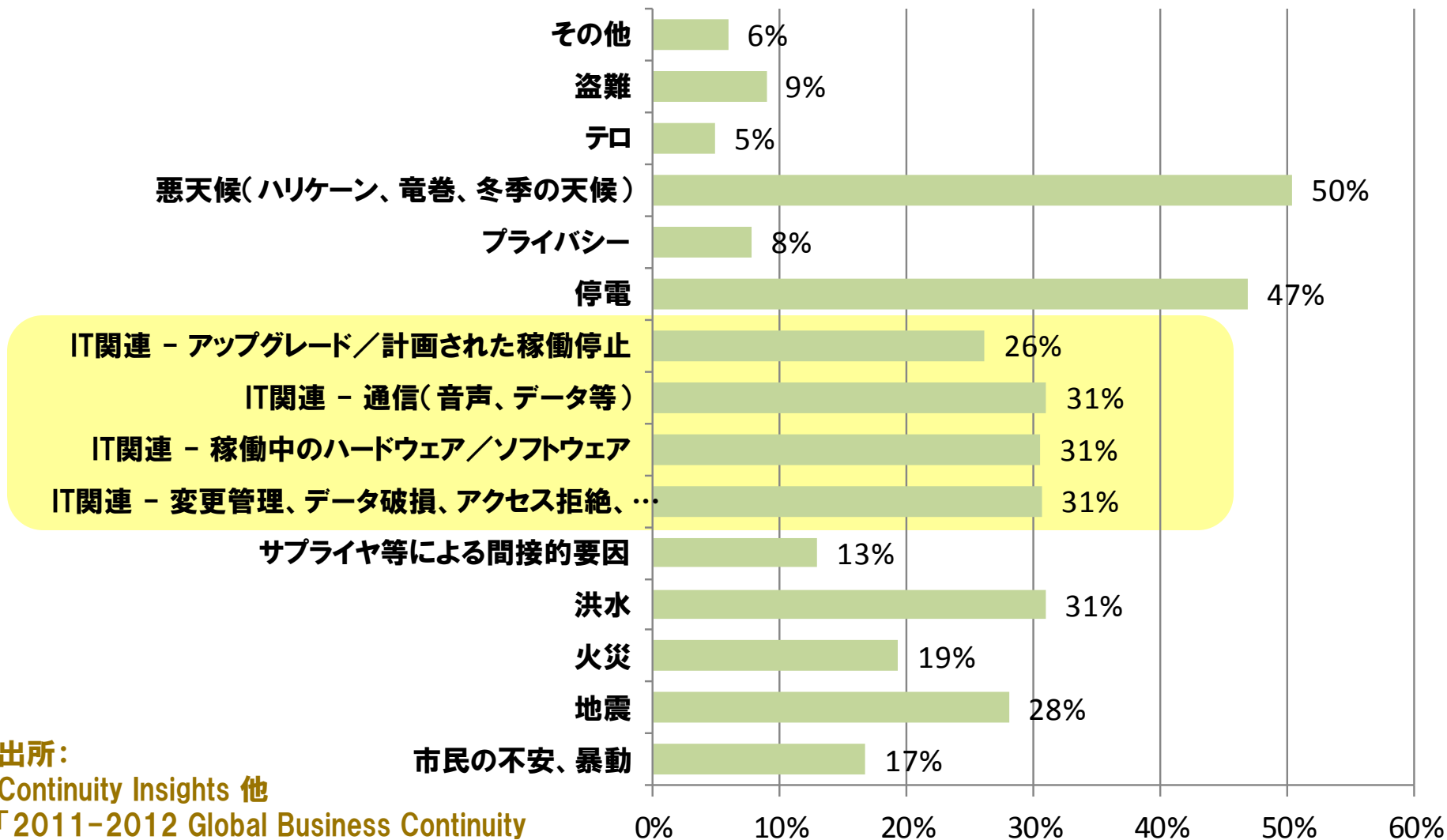
- **第1回 - 3/11 参加者8名**
 - BCIによるサプライチェーンのレジリエンスに関する調査レポートの解説
- **第2回 - 4/18 参加者6名**
 - 海外におけるBCMの取り組み事例の紹介
- **第3回 - 5/21 参加者6名**
 - 海外における BCM の実態調査結果の紹介
 - 主に海外で普及している BCM 関連ソフトウェアの紹介
- **第4回 - 6/27 参加者7名**
 - (株)パスコ様「リスクマネジメントクラウドサービス」
 - BCPに基づく演習の手法

第3回

- **海外における BCM の実態調査結果の紹介**
 - **米国**: Continuity Insights、KPMG LLP
 - 「2011-2012 Global Business Continuity Management Program Benchmarking Survey」
 - **英国**: Chartered Management Institute
 - 「The 2013 Business Continuity Management Survey」

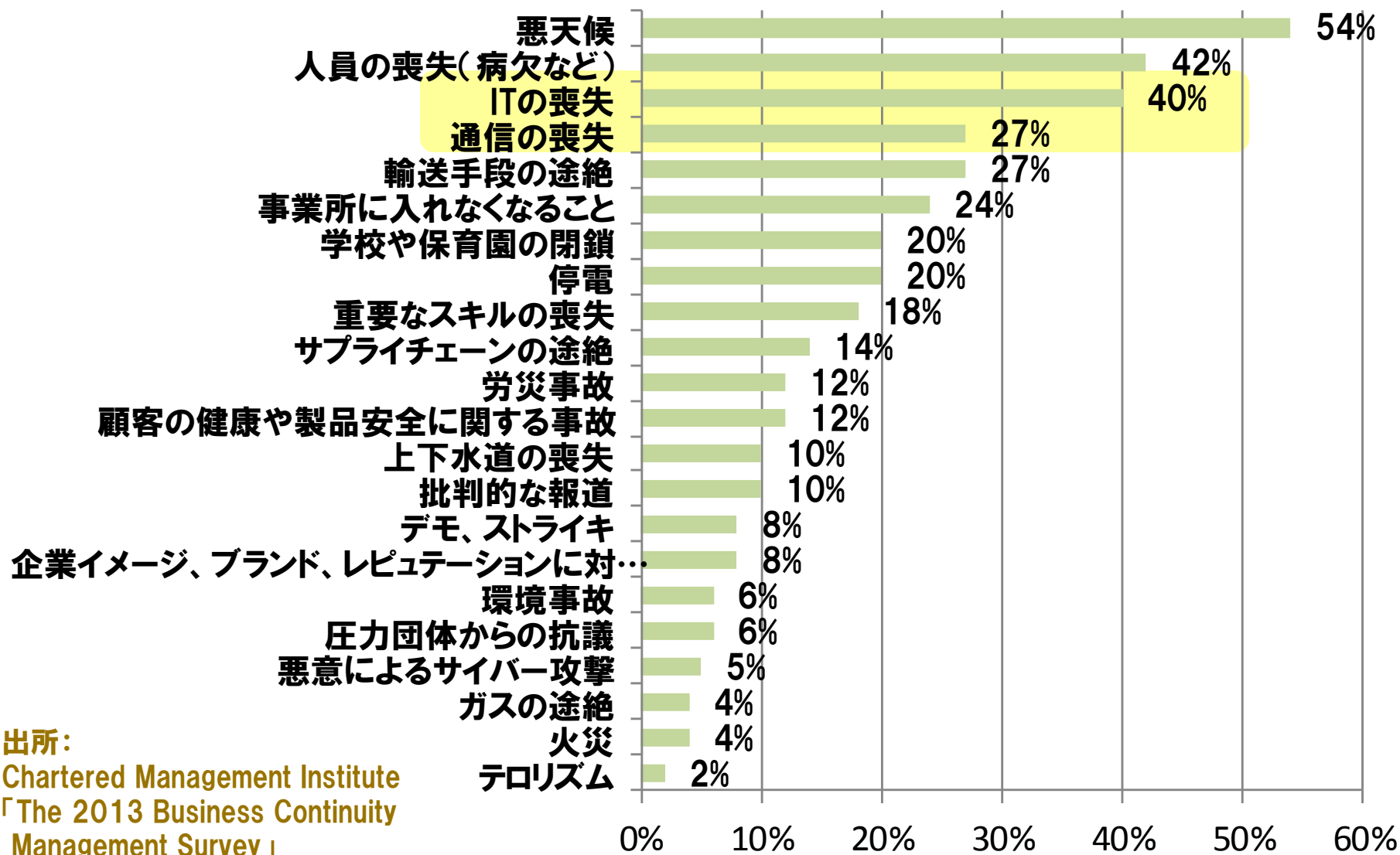
- **主に海外で普及している BCM 関連ソフトウェアの紹介**

事業中断の原因(主に米国における)



出所:
 Continuity Insights 他
 「2011-2012 Global Business Continuity
 Management Program Benchmarking Survey」

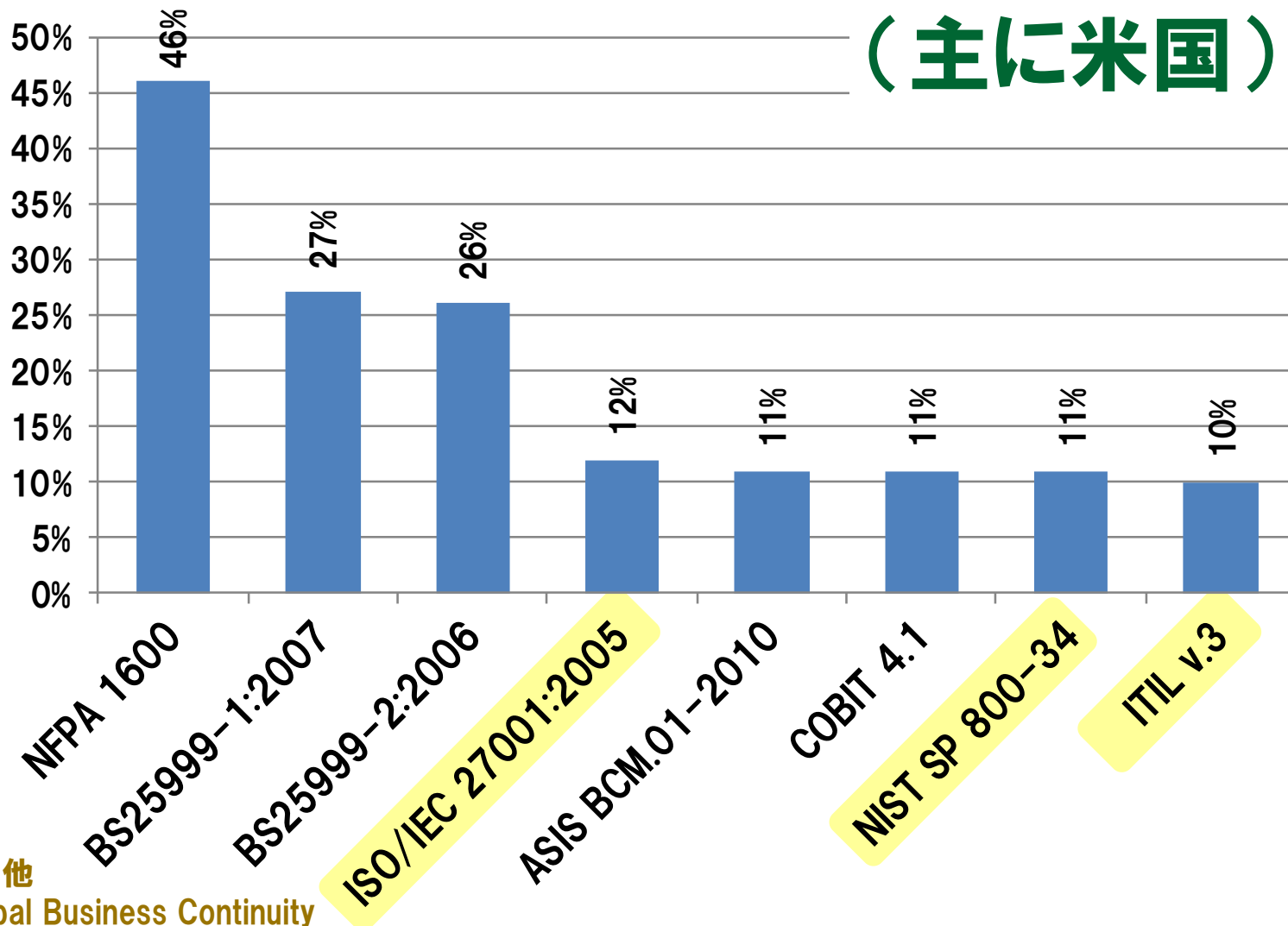
事業中断の原因(主に英国における)



出所:
Chartered Management Institute
「The 2013 Business Continuity
Management Survey」

BCMにおいて参照している規格等

(主に米国)



出所:

Continuity Insights 他

「2011-2012 Global Business Continuity

Management Program Benchmarking Survey」

株式会社 インターリスク総研


第4回

- (株)パスコ様「リスクマネジメントクラウドサービス」の利用方法に関する議論
- BCPに基づく演習の手法

リスクマネジメントクラウドサービス



演習の種類 - 分類例

種類	実施方法	目的	複雑さ
ドリル (Drill)	単一の組織にて、特定の手順をテストする	比較的シンプルなプロセスを評価する	シンプル
セミナー形式の演習 (Seminar exercise)	参加者をいくつかのグループに分け、シナリオと命題に基づいて議論させる	起こりうる状況や、その場面で実施すべき事などについて理解を深める	
机上演習 (Table-top exercise)	参加者を特定の役割に割り当て、シナリオに基づいて、どのように行動すべきか判断させる	特定の組織における緊急時の対応方法を検証する	
シミュレーション (Simulation)	仮想的な場面設定に基づくシナリオや状況付与に対して、どのように判断・行動するかをシミュレーションする	対応手順やそのための準備状況を確認し、状況判断の妥当性や、対応目標の実現性を含めて検証する	
実地演習 (Live play)	実際の人員や機材を動員し、実際に活動する場所で、リアルタイムで演習を行う	できるだけ現実に近い状況を再現して検証を行う	

(参考:BSI PD25666:2010 PUBLISHED DOCUMENT Business continuity management – Guidance on exercising and testing for continuity and contingency programmes) 10

今回ご紹介する演習手法の特徴

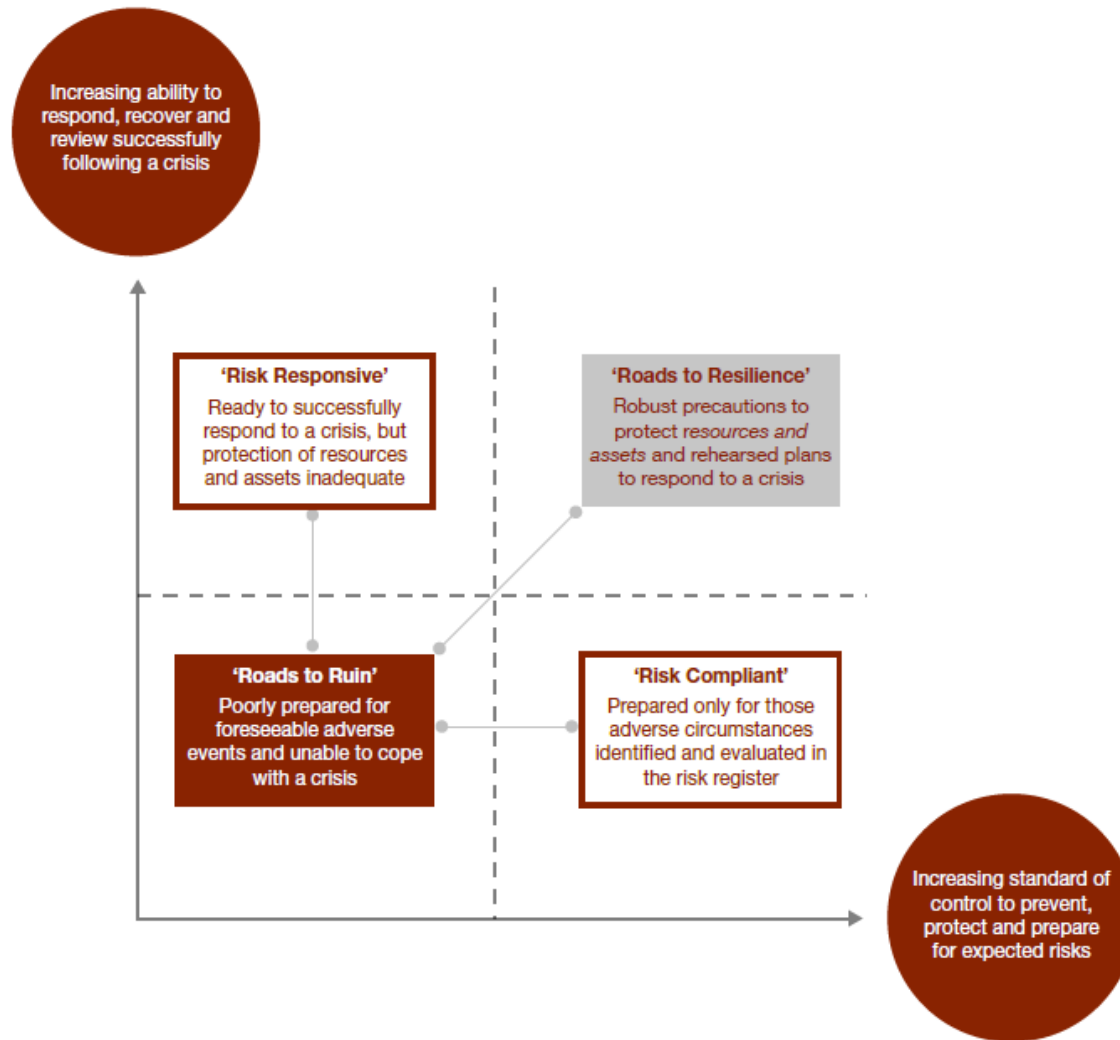
- 詳細なシナリオを作成しない
 - 演習開始時の場面設定はする
 - 演習の準備にかかる労力が比較的小さい
- 対話・ディスカッションを中心に進める
 - 一つ一つの実施手順を具体的に確認し、演習開始時に決めた場面設定の下でそれが実行可能かを検証する
 - 演習の途中で多少相談に時間がかかっても構わない
- 時間的なプレッシャーをかけない
 - リアルタイム性や即応性を重視しない
 - 所要時間は想像の上で見積もる

演習の進め方

1. ファシリテーターが、「この状況で何をしますか？」と質問する
2. 演習参加者は、BCP等の文書を確認し、ここでやるべきことを答える
3. ファシリテーターは上の答えを「実施内容」欄に記入し、さらに右側の欄を埋めるように質問していく
4. 「結果」の欄は、これまでの回答結果と場面設定に基づいて、ファシリテーターが決めて記入する

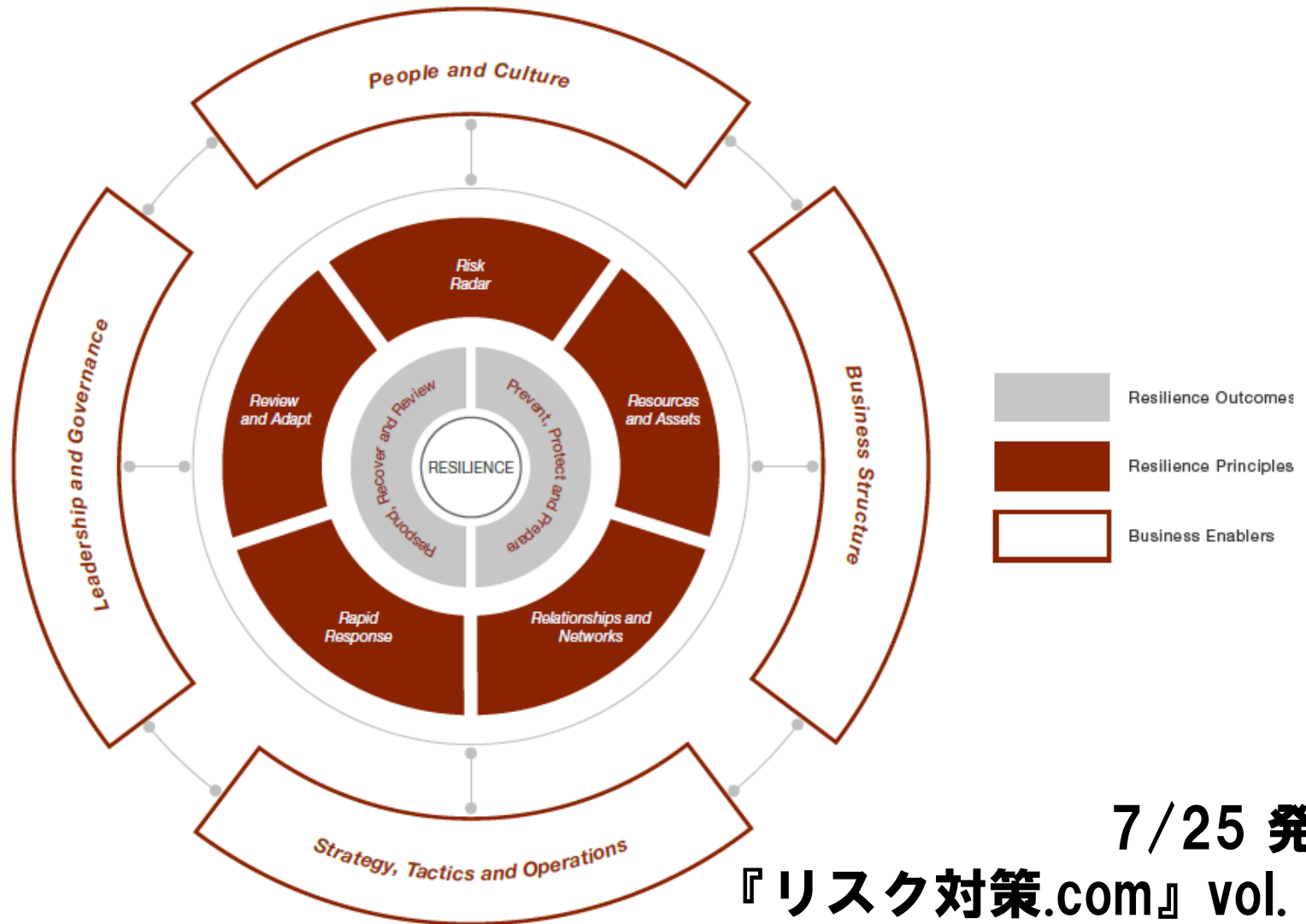
No.	実施内容	実施者	使用するもの (機材、材料、情報等)	実施場所	開始時刻/ 完了時刻	結果
1						
2						
3	・ ・	・ ・	・ ・	・ ・	・ ・	・ ・
4						
5						

Airmic – Road to Resilience



<http://www.som.cranfield.ac.uk/som/dinamic-content/news/documents/14827.pdf>

Airmic – Road to Resilience



7/25 発売
『リスク対策.com』 vol. 44

MS&AD

MS&ADインシュアランスグループ

株式会社インターリスク総研

コンサルティング第二部 BCM 第一グループ

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町2-105 ワテラスアネックス

Tel: 03-5296-8918 / Fax: 03-5296-8941

<http://www.irric.co.jp>